

【事例紹介】

## 日本人学生の留学経験の意味づけ

### -派遣留学を担当する大学教職員ができること-

How Former Japanese Exchange Students Find Meaning in Their Experience: The Role of a University's Outbound Exchange Program's Supervising Staff

常磐大学人間科学部 飯野 令子

IINO Reiko

(Faculty of Human Science, Tokiwa University)

キーワード：ライフストーリー、留学経験の意味づけ、海外留学

#### 1. はじめに

筆者が勤務する地方都市の比較的小規模な大学（以下、本学）では、海外の協定校（アメリカ、カナダ、タイの3か国）へ、1セメスター間の派遣留学が用意されているが、留学希望者が少なく、教職員が学生への働きかけに苦労している。教職員の間では、学生の経済的事情や、保守的な県民性から、仕方がないと見る向きもある。しかし本学でもミッションに従い、派遣留学する学生の増加を、国際化の目標の一つとしている。また目標以前に、教職員たちはこれまで、海外体験を経て、目を見張るような成長を遂げた学生の姿を目の当たりにしてきたことから、一人でも多くの学生に留学をしてほしいと、心から願っている。教職員の連携で学生への働きかけは十分に行われているにもかかわらず、留学する学生はわずかなのである。

もう一つの問題は、本学の派遣留学経験者がその経験を、後の学生生活や進路に、必ずしも有効に生かしていないことである。留学を経験した学生は、その貴重な体験によって逆に、周りの留学未経験の学生とのギャップから孤立することがある。また、進路の多様な選択肢に気づいて迷いが生じ、進路をなかなか決断できなかつたり、その逃げ道として目的もなく再度の留学や進学をしようとする場合もある。特に英語を専攻する学生は、留学で英語力が伸びたことによって、ぼんやりと思い描いていた英語が生かせる職種に挑むが、それには力が及ばなかつたり、適性ではなかつたりして、かえ

って就職に苦戦を強いられる。このように、後の学生生活、進路選択に問題を抱える学生が少なくない。

これらの留学を取り巻く問題を、教職員も認識しつつ、学生に働きかけてきたものの、なかなか解決しない。そのため本稿は、これらの問題を解決するための、留学経験者および今後留学する可能性のある学生たちへの、支援の方策を検討することを目的とする。

## 2. 日本人学生の派遣留学に関する調査・研究

日本人学生の派遣留学に関する調査・研究では、個々の大学で、教職員が留学プログラムを評価したり、留学プログラムを通じた学生の認識の変化を理解したりするために、参加学生へのアンケート調査や聞き取り調査などが一般的に行われてきた（例えば、大津・佐竹 2016a、大津・佐竹 2016b）。また研究者が、国際社会、日本社会の情勢など大きな視点から、近年の派遣留学の傾向を論ずるものもある（例えば、横田・小林 2013、横田・太田・新見 2018）。確かに、大学・教職員側の視点からの、留学プログラムに関する調査、研究者の視点による全国規模の調査は、留学プログラムのよりよいあり方を考えたり、数値から全体の傾向を知ったりするうえで重要である。しかし、上記のような本学の派遣留学にかかわる問題、すなわち留学を希望する学生が少ない、留学経験をその後有効に生かせないという問題は、留学プログラムを評価する調査でも、大規模な調査でも、解決につなげることができない。そのため、これまでとは異なる視点、つまり本学の派遣留学を経験した個々の学生の認識を、留学前から留学後の長期的な視野で、学生自身の視点から、質的に調査する必要があると考えた。

## 3. 調査方法

筆者は前述の問題意識から、2016年度以降、本学の派遣留学を経験した学生で、承諾が得られた学生に対して、ライフストーリー・インタビューを行ってきた。ライフストーリーを聞き取ることは、その人の人生における出来事をどのように組織し、意味づけるかを理解するものである（やまだ2000）。特に、聞き手との相互作用で、語りの中で経験が新たに意味づけられたり、意味づけが変わったりすることは、語り手のその後の行動にも変化を与えるという。そして個々のライフストーリーは、その一つひとつが代表性を持ち、ライフストーリーの受容者の経験との重なりが生まれ、受容者の人生にも影響を与えていくとされる。これまで大学生の海外体験をめぐるライフストーリー研究は、管見の限り唯一、国際交流に積極的にかかわる大学生のライフストーリーが編集され出版されている（花見 2006）。しかしこれは、大学生が国際交流について語った、ありのままを提示することを主眼とし、研究者の分析や解釈はない。本稿は、学生自身の視点という点で花見（2006）と共通するが、学生が聞き手である筆者との相互行為で、いかに経験を意味づけるか、という視点で分析することに大きな違

いがある。ライフストーリーを語る場での相互行為によって、留学経験のある学生にとっては、その場が、留学を振り返り、それぞれの経験を人生の中に位置づけ、今後の人生における意味を見つけていく場となり、将来へ向けての前向きな認識の変化が期待できる。そして留学経験者の経験の意味づけ方を、他の学生が知れば、それが個々人の持つ経験と何らかの形で結びつき、影響を与えていくと考えられる。そのため、教職員がこうした語りを生成する場を作り、留学経験者の語りを開示していくことは、留学経験者にとっても、他の学生にとっても、留学にまつわる不安や悩みの解消につながる、支援の方策の一例となると考える。

#### 4. 分析

本稿では、本学で英語を専攻し、派遣留学を経験した女子学生 A のライフストーリー・インタビューを分析する。A は、2016 年 8 月から 2017 年 1 月まで、3 年生後半の 5 か月間、タイの協定校へ交換留学し、2018 年 3 月に本学を卒業した。インタビューは A の卒業間近の、2018 年 1 月 24 日午前に 1 時間 40 分、A が在学中頻繁に出入りしてきた本学国際センターの個室で行った。インタビューは、A の承諾を得て IC レコーダーで録音し、文字化した。また、インタビューの内容を、研究と本学学生の留学促進のために学内外に開示する可能性があることにも、A からの承諾を得ている。

A はサラリーマン家庭で育ち、家族は海外と全く縁がない。中学時代から英語が好きで、高校生の時、震災支援の一環で実施されたアメリカ研修に応募し、参加した。英語専攻で本学に入学し、1 年時から交換留学生との交流に積極的に参加した。2 年時には本学の国際寮に入寮し、短期・長期の留学生と交流した。同時に、寮費を稼ぐためのアルバイトと勉強を両立させていた。3 年時、タイへ 5 か月の交換留学を経験し、4 年時の就職活動では、東京に本社があり、地元にも支社のある求人広告会社に内定した。

本稿では、A の語りの中のにあった大学時代の 3 つの大きな経験を取り上げる。一つ目は、A が寮費や留学資金を自ら稼ぐため必死にアルバイトし、苦勞しながらもアルバイト先で高い評価を得たことである。二つ目は、資金不足で北米への留学は断念し、教職員の勧めでそれまで考えもしなかったタイへ留学し、留学に満足していることである。三つ目は就職活動で、漠然とした憧れがあった英語を生かす仕事が、本当に自分がやりたい仕事ではないと考え直し、直接英語を使うことのない会社に就職を決めたことである。そして最後に、A が筆者との相互作用で、これらの経験がすべて「英語」でつながっていると、インタビューの場で、A 自身が意味づけたことを取り上げる。

##### 4.1 寮費のためのアルバイト

A は大学の通学圏内に自宅があったが、留学生と交流がしたいこと、家で母親との関係が良くなかったことなどの理由で、留学生と生活できる本学の国際寮へ入寮した。寮費は家族からの援助が期待できず、アルバイトで自ら稼ぐことが条件であった。アルバイト先では徐々に働きぶりを認められ、

社員しか担当しない難しい仕事に抜擢された。ところが、それがうまくできず、過呼吸を頻繁に起こすようになった。最後にはそれを乗り越え、できるようになったことが自信につながった。そして、それまで英語に自信が持てず、決心がつかなかった留学も、この出来事をきっかけに決意できた。

A: (前略) 自分が苦手なことがあっても、そんだけいろいろやって乗り越えられたのがすごい自分の自信につながって、そういうのが、何かこう、今まで自分に自信を持ってないんですね、英語においてもそうですし、いろいろ。だから、そこで乗り越えられたことによって、「できた」という1つの自分の自信になって、じゃあ、何か、留学も行ってみようとかって。そこもきっかけなんですよ。(後略)

#### 4.2.1 英語圏ではないタイへの留学の決意

Aは留学したい気持ちは強かったが、アメリカ、カナダは費用が高すぎて、諦めるしかなかった。その時、国際センター職員から費用の安いタイを勧められ、留学説明会に参加し、英語で授業が受けられることを知った。その後、タイへ留学した先輩の話、学内で開かれた留学セミナーの講師の話などを聞くことによって気持ちが強まり、留学を決意した。そして、両親の反対や友人たちの「なぜタイへ？」という質問にも一つひとつ答えていった。

A: (前略) 講師の方が来てそこでやってたときに、「留学することが大切なんじゃないって、その留学で身に付けたものが大切だ」みたいな、(中略) 留学することが大切じゃないってことは、やっぱりそこで自分が何を身に付けるかが大事じゃないですか。ということは、それってどこの国に行っても、その身に付けるのは自分次第、行動次第だなと思って、それだったら別にアメリカに行こうが、タイに行こうが、それは関係ないな、みたいな、自分の努力次第だし、みたいに思いました。

#### 4.2.2 留学中の困難と立ち直り

こうしてタイに留学したものの、到着した初日から日本へ帰りたくなった。食べ物、住む場所も合わず、親しい友人もできなかった。はじめの2か月は、辛くて毎日泣いていたが、弱音を吐くのは格好悪いと思い、日本には連絡をしなかった。

A: (前略) でも、私は「無理だ」と思いました。「こんなところに5か月もなんてられない」と思って。ほんとに。

3か月たったころから、英語のクラスメイトのタイ人学生と仲良くなり、徐々に楽しくなり、タイ語もできるようになってきた。

A: (前略) 自分もその子とコミュニケーションをとりたいがためにもっと(タイ語を)勉強しようというふうに思ったりとかしたので、そこからはタイ文字が読めるようになってきたりとか、しゃべれるように少しずつやっていったりとかっていうふうになって。そういうふうになってか

らはだんだん楽しくなってきたっていう感じですかね。

英語の授業では、自分と同じように自国で英語を学ぶタイ人学生の、英語に対する姿勢に刺激された。特にプレゼンテーションの授業で、自分は原稿を見ないと話せなかったが、タイ人学生は原稿を見ないで話すことなどが印象的で、アメリカやカナダでは経験できないだろうと思う価値を感じた。

A: (英語のプレゼンテーションの授業で) タイ人の子ってなんか全然スクリプト見ないでしゃべれちゃうんですね。そういうのもすごい刺激受けましたね。(中略) ここのタイにいる子って、こちらが英米語学科に入っているように、軽く英語が好きだとか、そのぐらいのレベルじゃないですか。(中略) 何かもう、自分で逃げる言い訳がないわけじゃないですか。だから余計刺激を受けたんですね。自分と同じ状況だからこそ。だから、刺激を受けた。「もっと頑張んなきゃ」と思えたんですね。だから、そういうのを含めてほんとに自分はタイに合ってたなと思います。

そして、残りの2か月はとても楽しく、タイ料理も大好きになった。帰国後、TOEICの点数が大きく伸びて、自分でも驚いたという。

#### 4.3 英語を使わない会社への就職

Aは大学に入った時点では、英語専攻なので、空港のグランドスタッフのような、英語を使う仕事がしたいとぼんやりと考えていた。留学から帰国し、就職活動を始めると、友人の間では、地元の会社に就職するのが当然という雰囲気があったが、Aは留学したことで自信がついて、東京で就職活動をした。初めは英語を生せる会社を回ったが苦戦し、自分がやりたいことは何かをもう一度考え直し、その結果、英語にはこだわらなくなった。英語を生かす仕事ではないからといって、専攻が無駄だったわけではなく、英語を専攻したからこそ、留学生と接し、いろいろな考え方が身につく、留学で困難を乗り越える経験ができた。それを仕事に生かしていくことができるという。

A: やっぱり英米語学科に入ったからこそ留学生といろいろ接点があって、話をしているいろんな考えが身に付いたりとか、他の学科であれば留学にそもそも行かなかったかもしれないし、留学に行っても、英語だけじゃなくて、他の文化の関わり方であったりとか、自分が嫌いな状況とかやりたくない状況に立ったときにどういうふうに行動するかとかっていうのを、ここの英米語学科にいたからこそ学べたことだと思うんですね。英語だけじゃなくて。

#### 4.4 大学生生活の経験を貫く「英語」という軸

Aは東京に本社のある求人広告会社から内定を得ることができた。それは、留学で困難を乗り越えた経験があったからであり、その留学の決意をしたのはアルバイトで自信をつけたからであり、アルバイトをしたのは留学生と生活できる国際寮に入るためであった。そこには英語を専攻し、常に英語を学ぼうとしてきたAの軸がある。

筆者：（前略）英語じゃなくて留学経験そのもので得たもの、英語ってなにか、2次的とまでは言わないけど、やっぱり重要な部分って、留学で辛いことを乗り越えたとか、やっぱりそういう部分が重要なんだよね。

A：はい。そうかなって思います。

筆者：それが、でも、就職にも役立って、留学以外のこともみんないろいろ影響し合っていくんですね。（後略）

A：そういうふうに結論できたのは、やっぱり「英語」の接点があったからだと思いますし、もし英語関係に進んでなかったら就職活動もこういうふうになることもなかったなって思います。

筆者：こういうふうになっているのは？

A：東京で就活しようとか、こういう仕事をやろうっていうふうには、そこまでやっぱり自信が持てたから東京で就職しようと思えたし、そう思えたのも留学があったからだし、みたいな。それは、X社（アルバイト先）で働いたからだし、とかっていうふうになったので、そういう元をたどると、やっぱり英語があったから今の自分があると思いますね。

筆者：そうだね。だって、X社で、なんで働いたかっていうと、国際寮に入るためだもんね。だから全部つながっていると。

A：そうですね。だから、それは最終的にやっぱり英語かなって思います。

筆者：一本の筋として英語があり、そこでもいろんな経験をできて、今に至るみたいな。

A：そうですね。

大学生活を貫く「英語」という軸は、就職後の展望にもつながっている。Aは勤務地には地元を希望しており、仕事やプライベートを通して、地元を外国人を呼び寄せ、地元を元気にしていきたいという夢を持っている。

## 5. 考察とまとめ

Aは教職員から見ると、留学の成功者であった。Aに話を聞くまで、留学前、留学中、そして就職活動で内定を得るまでに、これほどの困難があったとは筆者は想像もしていなかった。Aがアルバイトで自信を得て、それによって留学に踏み出せたこと、タイ留学前の、留学先についての葛藤、留学中の困難、英語にこだわらない就職に至った経緯は、教職員として新たに知ることばかりであり、今後、留学する学生の、経験の意味づけ方の参考になるものばかりである。そして、大学生活の3つの大きな経験と、今後の展望を「英語」という軸で貫いたことは、このインタビューの場で、Aと筆者との相互行為によって行われたことである。Aにとっては就職活動で自分を振り返る過程で、ある程度見えていたことかもしれないが、今後の展望まで貫く軸として、A自身もここで初めて再確認した。聞き手である筆者には、新鮮な驚きと、大きな納得がいくものであった。

Aにとっては、この語りの場が、これまでの経験を振り返り、経験を肯定的に意味づけ、今後の展望を明確にする機会となったといえる。Aのこうしたストーリーを受容する学生たちは、Aの経験の意味づけ方を自分の経験と重ね合わせ、留学や大学生活、就職に対する新たな意味づけをし、不安や迷いを解消することが期待できる。教職員がこうした留学経験者の経験を意味づける場を共に作ることで、そして教職員が媒体となり、経験者のストーリーを他の学生に伝えていくことが、留学経験者の帰国後の学生生活を支援し、少しでも留学を考える学生たちの背中を押す支援につながると考える。

本稿でAと筆者が共に紡いだストーリーはAにとって、留学にも、英語を専攻した大学生活にも胸を張り、卒業後も就職先で自信を持って生きていくことにつながるだろう。そして、こうしたストーリーが教職員の働きかけで、さまざまな形で他の学生に開示されていけば、他の学生にとっても、自らの経験をAの経験と重ね合わせ、留学やその後の就職に新たな意味づけをし、不安や迷いを解消する可能性になる。したがって、このような語りを生成する場を作ることが、留学経験者を支援し、経験者の語りを伝えていくことが、留学する学生を増やすことにつながると考える。

今後、インタビューした他の留学経験者の語りの分析も進め、それらを重ね合わせて、本学の留学促進と、留学経験者支援の方策をさらに検討していきたい。

#### 参考文献

- 大津理香・佐竹正夫（2016a）「短期海外語学研修の効果—先行研究と常磐大学の事例—」『常磐国際紀要』第20号、pp. 123-146.
- 大津理香・佐竹正夫（2016b）「短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか—常磐大学の場合—」『留学交流』Vol. 65、pp. 16-24.
- 花見槇子編（2006）『大学生と国際交流—四人のライフストーリー—』ナカニシヤ出版
- やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学—」やまだようこ編著、『人生を物語る—生成のライフストーリー—』ミネルヴァ書房、pp. 1-38.
- 横田雅弘・小林明編、（2013）『大学の国際化と日本人学生の国際指向性』学文社
- 横田雅弘・太田浩・新見有紀子（2018）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト—大規模調査による留学の効果測定—』学文社